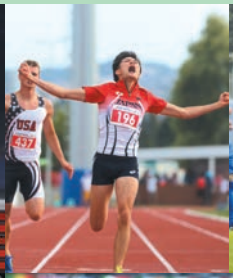
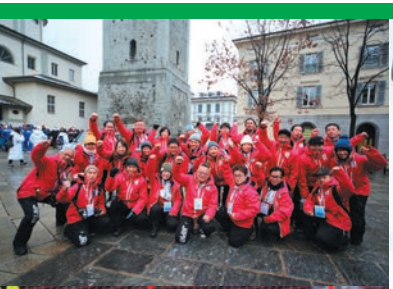


デフアスリートをささえる vol.4



国際的なデフスポーツ大会における国際手話通訳編

目次

P.1	目次
P.2	ごあいさつ
P.3	デフリンピックが日本で開催
P.4	国際手話とは
P.5～6	国際手話通訳とは
P.7	国際的なデフスポーツ大会における 国際手話コミュニケーションの展開
P.8	デフスポーツ大会で使う国際手話表現
P.9～12	国際的なデフスポーツ大会における 国際手話通訳の展開
P.13～15	国際的なデフスポーツ大会における 国際手話通訳としての心構え
P.16～17	デフスポーツで使う国際手話の会話例
P.18	国際手話での数の表現
P.19～21	国際手話通訳者の行動規範と解説

ごあいさつ

全日本ろうあ連盟
スポーツ委員会 委員長
太田 陽介

スポーツ庁は「する・みる・ささえる」といった多様なスポーツライフを通じて、スポーツ参画人口の拡大を目指しています。アスリートのプレーを「みる」、ボランティアの「ささえる」活動を通して、「する」スポーツへの興味が喚起され行動へとつながることが期待されており、きこえない、きこえにくい人のスポーツ活動を通した社会参加と共生社会の実現にも通じる取組になります。

2025 年に東京・福島・静岡で開催されるデフリンピック（主催 / 国際ろう者スポーツ委員会（ICSD））は、日本では初めての開催であり、また 1924 年にパリで最初のデフリンピックが開催されてから100周年の節目となる大会になります。
この大会の開催を契機に、手話言語の理解・普及・拡大など従来からの情報保障の推進・強化に加え、スポーツ施設や競技大会において、デジタル技術を活用した、新しいコミュニケーションツール等の開発が進んできています。一方で、きこえないアスリート（デフアスリート）がスポーツをするにあたっては、スポーツ関係者によるきこえないことや手話言語への理解促進とともに、デフアスリートのスポーツ活動をささえる手話言語通訳者の育成が重要になっています。

そこで、本委員会では令和２年度より、スポーツに精通した手話言語通訳者の育成を目的として、スポーツ庁の「障害者スポーツ推進プロジェクト」を受託しており、令和５年度は、国内外でのスポーツの国際大会の場で手話言語通訳者が必要な知識を解説するデフスポーツの国際大会における国際手話通訳編と、専門種目としてオリエンテーリング競技、バレーボール競技、ビーチバレーボール競技を解説するパンフレットを作成しました。スポーツ活動の現場で通訳を行う方々の知識と技術の向上にこれらの手引きが役立つことを願っています。

デフリンピックが日本で開催

2025年に東京でデフリンピックが開催

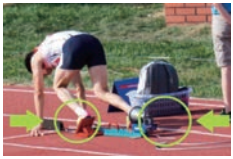
2025年11月15日～26日に東京・福島・静岡でデフリンピックが開催されます。

デフリンピックとは？

きこえない選手の国際的なスポーツ大会です。
デフ（Deaf）とは、英語で「きこえない」という意味です。
オリンピックと同じように４年に１度、夏季大会と冬季大会が２年ごとに交互に開催されます。競技ルールはオリンピックと同じですが、きこえない選手のための視覚的保障がなされた競技環境があることがデフリンピックの特徴です。

視覚的保障とは？

音や審判の合図がきこえないという、選手にとって不利な状況を視覚的に補うことです。
デフリンピックでは、陸上競技や水泳競技のスターターの音はフラッシュランプを使って選手にスタートを知らせています。サッカーやラグビーでは審判が笛を吹くとともに、旗または片手をあげることで反則などが起きたことを選手に知らせます。



国際的なデフスポーツ大会について

きこえない選手の国際的なスポーツ大会には、デフリンピックの他に、国際ろう者スポーツ委員会（ICSD）公認の世界ろう者選手権大会やアジア太平洋ろう者スポーツ連合（APDSC）主催のアジア太平洋ろう者競技大会等があります。

URL：ICSD公式ホームページ http://www.ciss.org

国際的なデフスポーツ大会への支援

スポンサーが少なく、経済的負担が大きいなどの課題があるため、SNS（FacebookやInstagram、Xなど）を通して発信していただくことで、デフリンピック知名度アップにご協力ください！

URL：デフスポーツ・サポーター募集
https://www.jfd.or.jp/sc/supporter

URL：東京 2025 デフリンピック大会
https://www.deaflympics2025.com/

国際手話とは

国際手話は「International Sign」と呼ばれています。「International Sign Language」ではありません。日本手話言語の英語表記は「Japanese Sign Language」です。英語では「Sign」と「Sign Language」は使い分けられており、両者の違いは言語であるか否かにあります。つまり、国際手話は言語というよりは国際的な手話コミュニケーション手段として世界に広く受け入れられているものです。
違う手話言語を使うろう者同士の会話では、相手の手話表現がわからないときや、自分の手話表現が相手に伝わらないときには、身振りやその場でとりあえず決めた手話を使う様子がしばしば見られます。これが国際手話コミュニケーションです。過去より国際的な交流の場で、多くのろう者が国際手話コミュニケーションを重ねており、手話単語や表現技法がある程度共有されてきています。デフスポーツの分野でも、世界選手権大会やデフリンピックなどの国際競技大会で世界各国から集まる参加者が国際手話によるコミュニケーションを展開しており、スポーツ用語について手話単語が共有されています。国際ろう者スポーツ委員会の役員も国際手話で挨拶をしたり競技規則の説明をしたりします。

国際手話の表現例

スポーツに関する国際手話は共有されてきていますが、日本手話言語と同じく、一般的な表現、競技団体ごとの表現、また国や地域性により異なりますので、現場ですり合わせながら行うことが重要です。

日本語	日本手話言語	英語	国際手話
試合		Match	
ルール		Rule	
審判		Judge	

（出典：大杉豊・関宜正編『わたしたちの手話 学習辞典』全日本ろうあ連盟出版局 2010 年；「Let’ s Try 国際手話」編集委員会編『Let's Try 国際手話』全日本ろうあ連盟 2019 年）

国際手話通訳とは

1. 国際手話ができるから通訳もできる？

「国際手話ができるから通訳もできる」ということについて、バレーボールに例えて考えてみましょう。
バレーボールをするためには、まず体力を作らなければなりません。毎日筋トレを欠かさず続けて、体力を作っていきます。しかし、その体力だけではバレーボールはできません。バレーボールを始めるためには、バレーボールの基本的なルールや各ポジションの役割に関する知識、ボールを操作する技術が必要になります。パスやサーブ、アタックなどの技術を練習によって身につけたあと、さまざまな戦術を交えて試合で得点を取ることができるのです。
このバレーボールの例のように、国際手話ができるためには、まず自国の手話言語の習得が必要になります。そして、毎日単語の暗記を続けて、覚えていきます。しかし、単語を覚えただけでは国際手話通訳はできません。通訳を始めるためには、通訳の倫理、役割、異文化などの知識と通訳の技術が必要になります。日本手話言語から国際手話、国際手話から日本手話言語への逐次通訳と同時通訳は、訓練によって身に付けることができる技術です。知識と技術そして通訳者としての倫理が備わって、双方のコミュニケーション目的をつなげることができるのです。
このように、国際手話ができるから国際手話通訳もできる、というわけではありません。段階的に必要な知識やスキルを身に着け、国際手話通訳についての理解を深めましょう。

2. 国際手話通訳者の役割

日本の国際手話通訳の役割は、日本手話言語と国際手話を介して内容や文脈等すべての情報を双方に提供し、世界と日本の橋渡しをすることにあります。
例えば、デフスポーツ関連の国際大会の場合、各国代表のろう者が国際手話を使って会議を進めます。しかし、国際手話の中にはアジア、ヨーロッパ、南米などそれぞれの地域特有の表現が混ざることもあります。そのため、国際手話通訳には、地域特有の手話表現や現地の事情、競技の内容についての知識も必要になります。実際、国際手話によるコミュニケーションができるろう者の選手や監督でも、自分の国から専任の国際手話通訳者を同伴する代表もいます。つまり、国際手話通訳で用いられる言語は、国際手話と音声英語が主流ですが、自国の音声言語または手話言語にも堪能であることが大前提であり、それを基にした高い言語処理能力を有することが条件の一つとなります。
また、国際手話通訳は、国際手話や手話言語の知識だけでなく、世界の文化的背景や歴史に関する知識も必要不可欠となります。世界各国と自国との違いに対応しうる高度なコミュニケーション能力が備わっていることも求められます。国際的な場面で異言語・異文化間のコミュニケーションが成功するか否かは、国際手話通訳者の働きに大きくかかっているのです。

3. 国際手話通訳の背景

国際手話通訳者が初めて登場したのは、1987年にフィンランドで行われた世界ろう者会議でした。
以後、時代の変化とともに国際手話通訳に対する需要が高まり、現在では、世界ろう者会議、世界手話言語通訳者会議、デフリンピック、国連ハイレベル会合など、あらゆる場で世界中のろう者と聞こえる人の国際手話通訳者が活躍しています。最近だと、ブラジルで開催されたデフリンピックにも国際手話通訳者が配置されていました。

国際手話通訳とは

4. 世界手話言語通訳者協会（WASLI）の活動

手話言語通訳関連の国際組織として、世界手話言語通訳者協会（WASLI：World Association of Sign Language Interpreters）があります。
WASLIは世界中の手話言語通訳者を専門職として確立することを目的とし、2005年に設立されました。2023年現在では、日本を含めて国単位で53、地域単位で56の協会が会員として加盟しています。WASLIでは４年おきに世界手話言語通訳者会議（WASLI Conference）が開催されており、手話言語通訳分野の発展を目指して、各国の手話言語通訳関連の研究発表や手話言語通訳者同士の情報交換をする場にもなっています。2023年７月には韓国・済州島で第６回世界手話言語通訳者会議が開催されました。
世界手話言語通訳者協会（WASLI）は世界ろう連盟（WFD:World Federation of the Deaf）と共同して、国際手話通訳者認定試験を行っています。2023年12月現在では、ろう者と聞こえる人を合わせて42名の国際手話通訳者と17名のプレ国際手話通訳者が認定されています。

5. 世界の国際手話通訳

ヨーロッパでは、2009年に欧州手話言語通訳修士課程が開講され、多くの国からろうときこえる教授と学生が集結しており、国際色豊かな教育環境で、国際手話と英語を中心に通訳学を学べるようになっています。手話言語通訳分野における世界の状況を見てみると、きこえる人だけでなくろう者も協働することがスタンダードになってきており、各国の手話言語通訳者同士で国際手話を使ってコミュニケーションを取ることが多いです。その中でろうの国際手話通訳者が、同じ国のろう者だけでなく、きこえる人の手話言語使用者に対して国際手話から自国の手話言語に訳すこともよくあります。

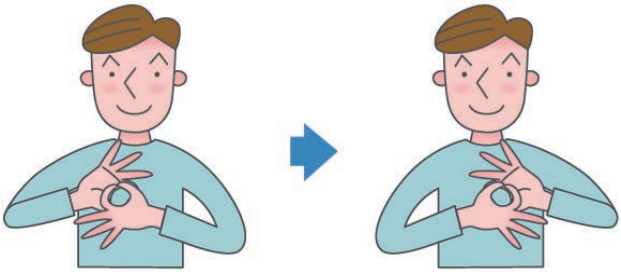
6. 日本の国際手話通訳

1991年に東京で開かれた第11回世界ろう会議には、日本からも国際手話通訳者が派遣されました。それ以来、デフリンピック、世界ろう会議、ICSD会議、国際活動に関わる各団体の研修、アジアのろう団体関連の会議、海外視察、講演会などで、ろうの国際手話通訳者が活躍してきました。
東京デフリンピックを見据え、全日本ろうあ連盟はデフリンピックに向けた国際手話通訳者登録試験を実施し、2023年12月には７名の国際手話通訳者が登録されました。これまでは世界ろう会議等に派遣されることが多かったのですが、2025年に開催されるデフリンピックに向けて、国内でも国際手話通訳者に対する需要がさらに高まっています。日本で国際手話通訳の体制を確立するためには、国際手話通訳に対する社会的認知を高めることと、国際手話通訳者を育成することが急務の課題です。
今後も世界と日本の橋渡しをすることによって、活動の場が広がっていくことが期待されています。

デフリンピックの手話表現

デフリンピックを主催する国際ろう者スポーツ委員会（ICSD）で使われている手話表現です。

イラストのように両手２指で輪をつくり、輪を向かい合わせるようにして交互に２回つける。



出典：全日本ろうあ連盟スポーツ委員会『デフリンピックーろう者のオリンピック』2021年、18頁。

国際的なデフスポーツ大会における国際手話コミュニケーションの展開

身振りや視覚的な空間の使い方

国際的なデフスポーツ大会でよく使われる手話単語を学ぶとともに、国際手話コミュニケーションを構成するもう一つの要素である表現技法についての知識も押さえておきましょう。国際手話通訳の第一人者であるビル・ムーディ（米国）は「世界各地の手話言語は身振りを基礎に発展した言語で、身振りや視覚的な空間などの使い方に共通した文法の特徴を持つので、手話単語のすり合わせができれば、あとは共通する話題や文脈で補うなど談話的な方略を用いて話せば良い」と述べています。身振りはいくつかの種類がありますが、国際手話の表現技法を構成する主なものは「指差し」と「描写」です。

指差し

「指差し」は文字通り人差し指で何かを指す動きで、手をある方向に向けたり、ある場所を触ったりすることで、方向、場所、事物を指し示す身振りです。掌を使った丁寧な表現や、物に直接触る「手差し」などもあり、見える物を指さす例もあれば、見えない物を指さす例もあります。例えば、誰もいない椅子を指さして「さっきまで座っていた選手はどこに行った？」と聞く例や、遠く見えないところにある競技会場の大体の方角を指さして「みんな会場に集まっています。」と説明する例があります。また、「誰が」「誰に」といった関係をはっきりさせるときも指差しを使うのが最も効果的です。

描写

「描写」は物の形や状態、動き、位置関係などを手指で再現する映像的なもので、例えばホテルの入り口の形とか、プールの水面の状態とか、審判員の動きとか、サッカーでのボールとゴールの位置関係とかを説明するときの表現です。この描写的な表現は各国の手話言語で「CL 表現」と呼ばれている文法と同じものです。

異文化による調整

「指差し」も「描写」も人それぞれの人種や文化、音声言語からあまり影響を受けませんので、世界的に通じやすく、国際手話コミュニケーションの基本的な表現技法になります。一方、文化的な身振り、例えば日本人がよく使う「OK」を意味するジェスチャーは人によっては「ゼロ」と読み取られてしまうことがありますし、文化の違いによっては侮辱的な意味に取られることもありますので、使うのを控えた方が良いでしょう。他の例では、日本手話言語では親指が「男」、小指が「女」を表しますが、外国ではそれぞれ「良い」と「悪い」を意味する場合があるので、注意が必要です。

国際手話の基本、手話単語と表現技法を解説しました。違う手話言語を使うろう者と出会ったら、どのような場面であるかを察し、国際的に通じやすいジェスチャーを中心に指差しと描写を使って表現し、手話単語をすり合わせていく国際手話コミュニケーションを皆さんも楽しんでください。インターネットでも、国際ろう者スポーツ委員会が公式に発信する Facebook や Instagram にて、デフスポーツを話題にした国際手話による動画が数多く発信されていますので、英語のテキストや字幕と合わせて学習の参考にしてください。

国際ろう者スポーツ委員会のSNS

Facebook：
https://www.facebook.com/Deaflympics/?locale=ja_JP

Instagram：
https://www.instagram.com/icsd_official/?next=%2Fdongol13%2Ftagged%2F&hl=ja

デフスポーツ大会で使う国際手話表現

基本的な日常会話と競技大会用語について国際手話コミュニケーションでよく使われる表現（手話単語）をいくつか紹介します。下記の URL または QR コードから国際手話通訳者が実際の国際手話表現（手話単語）を表している映像が見られます。

国際手話表現の映像　URL：https://www.jfd.or.jp/sports/sasaeru4-is/

QRコードはこちら↓

日常会話の国際手話表現（例）

国際手話、人、会う、朝、夜、朝昼夜、家族、情報、知っている、良い、まあまあ、悪い、ある、ない、質問、答える、問題、トラブル、起こる、～したい、終わり、まだ、通訳、医者、警察（警備員）、ホテル、食堂、バス、地下鉄、交通、待つ、速い、etc.

競技大会用語の国際手話表現（例）

エントリー、オープンする・締め切る、開会式、閉会式、表彰式、アクレカード、ウォームアップ、トレーニング、試合、プレー、予選、決勝、休憩、会場、競技フィールド、スタジアム、勝つ、負ける、引き分ける、チーム、個人、選手、コーチ、リーダー、代表、スポーツディレクター、技術規則、審判、抽選、ペナルティ、出場停止、退場、抗議、世界ろう者選手権大会、アンチドーピング、聴力検査表、辞退・棄権、フェアプレー、etc.

デフスポーツ関連書籍

デフリンピックや国際的なデフスポーツ大会で使われる「国際手話」やデフスポーツ大会やイベントで使われる「スポーツ関連の手話単語」を学ぶ書籍として次のものがあります。

デフスポーツ関連書籍のご案内　URL：https://www.jfd.or.jp/sc/books

国際手話ハンドブック

Let's Try 国際手話

Let's Try 国際手話２

スポーツ手話ハンドブック

QRコードはこちら↓

国際的なデフスポーツ大会における国際手話通訳の展開

日本で国際ろう者スポーツ委員会（ICSD）公認の世界ろう者選手権大会やデフリンピックが開催されることを想定し、国際手話コミュニケーションが発生しうる場面それぞれにおいて、どのような国際手話通訳が求められるかを見てみましょう。

場面	説明	通訳態勢
到着（空港等） Arrival	各国の選手団が空港に到着し、入国審査と税関審査を終えてたくさんの荷物とともにゲートから出てきます。選手団の国名と人数を確認し、待機しているバスに案内します。そして、組織委員会本部に連絡をとります。 射撃競技や陸上競技などの選手が持ち込む競技用具の一部については、特別な手続きを取る必要があります。	選手団の代表（チーム・リーダー）と国名、氏名、人数などを国際手話で確認します。 入国審査やメンバーの体調不良など有事に備えて空港ごとに国際手話通訳の提供が望ましいです。 リーダー
宿泊施設 Hotels	選手団一人ひとりがパスポートを確認され、署名してチェックイン手続きをとります。 フロント係が施設の利用方法と緊急時の対応について選手団に説明します。通常の利用者と比べて洗濯量が多めになりますし、試合の時間によっては食事時間の調整が必要になります。	フロント係が事前に説明事項を英語で書いた資料を準備しますが、国際手話による説明動画が準備されていると良いでしょう。 問題がある時や緊急時には国際手話通訳の提供が望ましいです。
食堂 Restaurant	最初の数日は、文化や宗教、健康の関係で食事時間や料理内容に関する質問が多く出ます。例えば、「宗教上の理由で豚肉やラード（豚脂）を使った料理は食べられません。」などです。	食堂スタッフが国際手話や筆談にて対応できるでしょうが、料理内容の改善など要望が出た時は国際手話通訳の提供が必要な場合もあります。
IDカード発行 Accreditation	大会に参加する全ての人に必要なカードです。大会への参加が許可されるのと同時に、競技会場の入れる範囲や乗れる交通手段などがカードで識別されます。 ICSDが管理する登録データをもとに発行されますので、ICSD担当者が全体の監督に入ります。	手続きを始める選手団のチームリーダーが担当者から国際手話で手順の説明を受けます。一人ずつパスポートを確認した上で、署名をしてカードを受け取ります。問題が起きた時はICSD担当者が対応します。
聴力検査 Hearing （Audiology） Tests	ICSDが公認する大会に参加する選手はよくきこえる方の耳の聴力損失が55デシベルを超えている必要があります。 ICSDのオージオロジー委員会（Audiology Commission）の指示を受けた選手が聴力検査を受けます。	専門のスタッフが検査時の指示事項を英語で書いたカードなどを準備しますが、国際手話による説明動画が準備されていると良いでしょう。

国際的なデフスポーツ大会における国際手話通訳の展開

場面	説明	通訳態勢
競技会議 Technical Meeting	ICSDのスポーツ・ディレクター（ろう者、例えば水泳競技の場合は「水泳ディレクター」と呼びます。）が運営する競技会議で、最初の試合が始まる1～2日前に開催され、技術規則の主なポイントや試合の進め方の取り決め内容が国際手話で説明されます。開催国の競技団体委員や審判員、各国のチームのコーチなどきこえる参加者のために国際手話―英語間の通訳が必要になります。	スポーツ・ディレクターの国際手話による説明を英語に通訳し、きこえる参加者の英語を国際手話に通訳するサービスの提供が必要になります。ただし、各国チームのコーチなど代表者は発言するときは国際手話を使うか、自国チームから国際手話通訳者を同席させる必要があります。競技専門の用語が使われますので、その競技の規則を事前に学習して準備します。
審判団会議 Referee Meeting	主として開催地の競技協会の役員が審判員を招集して開催します。競技規則の確認をするほか、ICSD公認大会独特の規則やろう者とのコミュニケーションの方法を学習します。ちなみに、審判員は定める資格を有し、国際競技大会に対応できることが条件とされていますので、英会話ができる人が多く配置されます。きこえる人がほとんどですが、競技によってはきこえない審判員が主体となることや、ICSDのスポーツ・ディレクターが加わることもあります。	スポーツ・ディレクターが参加するときや、きこえない審判員が主体となるときは、きこえる人とのコミュニケーションを保障するために国際手話―英語間通訳の提供が必要になります。 競技の規則を十分に学習しておくことが肝要です。 スポーツ・ディレクター
競技：抗議 Protest Commission	競技の参加者は規則が守られていないなど不服がある時、定められた手順に沿って抗議をする権利があります。競技の審判長に英語で書かれた抗議書類が提出されると抗議委員会が開催されます。ICSDのスポーツ・ディレクターと開催国の競技団体の役員、審判長が抗議の内容を精査して結論を出し、ディレクターが提出者に英語による回答文書を渡すとともに国際手話で説明します。	抗議委員会が開催される時は国際手話―英語間通訳の提供が必要です。 競技の規則を十分に学習しておくことが肝要です。
競技：怪我等（会場）	競技中に怪我の発生や体調不良の訴えが度々あります。自国チーム同行の医師が対応することもあれば、会場に待機する応急手当担当者が対応することもあります。しかし、医療機関の受診が必要との判断がなされたときは、救急隊員などと連携して対応します。	怪我や体調不良の程度によりますが、軽度であれば医療スタッフが身振りや筆談で対応します。状況によってはろう者ときこえる人のペアによる国際手話の通訳態勢が望ましいです。

国際的なデフスポーツ大会における国際手話通訳の展開

場面	説明	通訳態勢
競技：怪我等 （医療機関）	競技会場での判断により医療機関へ移動した選手等には医療スタッフが対応します。医療機関によっては、外国語に対応できるところがありますが、外国の手話言語に対応できるところはほぼありません。	医療機関での検査や診療の時は、選手それぞれの状況に合わせた対応が必要です。 自国選手団の通訳者が一緒に来られないことも想定して、ろう者ときこえる人のペアによる国際手話通訳の配置が望ましいです。
ドーピング検査 Doping Tests	ICSDはアンチ・ドーピング活動を重視しており、啓発に努めるほか、全ての公認大会でドーピング検査を実施することを義務付けています。専門スタッフのチームが試合後すぐに抜き打ちの形で指定した選手を決められた場所に同行させてテストを実施します。選手はドーピング検査の手順を知っていることが望ましいのですが、内容を覚えていないとか動揺してしまうとかの理由で、うまく対応できないこともあります。	専門スタッフが身振りや英語で書かれたカード等で対応しますが、国際手話による説明動画、あるいは国際手話通訳の提供があればなおさら良いでしょう。
開会式 Opening Ceremony 閉会式 Closing Ceremony	一般的には、選手団の入場行進、組織委員会やICSDの挨拶、大会旗の掲揚、選手宣言、そしてアトラクションなどがプログラムに盛り込まれます。 ICSDの公式言語は国際手話と英語ですので、大会ではこの公式言語に加えて開催国、すなわち日本手話言語と日本語が開会式 / 閉会式で使用されます。 大きなスクリーンやディスプレーが使用されることも度々あります。	国際手話、英語、日本手話言語、日本語による情報アクセシビリティが求められますので、開会式 / 閉会式には全体を通した通訳コーディネーターを配置し、各言語の通訳チームが連携して対応します。
ICSD代表理事付 ICSD EB Members	ICSD公認大会には理事会を代表する理事が派遣されます。この理事がスポーツ・ディレクターや開催国の組織委員会と連携して大会全体の運営を見守ります。 また、代表理事は開催国の競技団体役員や行政・議会の要職者などと面談する機会も多くなります。	ICSDの代表理事は国際手話を使います。 あらゆる場面に対応するために、ろう者ときこえる人のペアによる国際手話通訳の提供が常にできるようにします。

国際的なデフスポーツ大会における国際手話通訳の展開

場面	説明	通訳態勢
会場受付（選手団） Reception Desk	試合があるチームのメンバーは決められた時間に指定された入口へ案内しますが、それ以外のときは一般客と同様に観客席に案内します。この区別はIDカード記載事項と試合スケジュールを照合して確認します。	スタッフが身振りや筆談で対応しますが、国際手話による説明動画や視覚的に分かりやすいサインボードがあればなお良いでしょう。
会場受付（観客） Reception Desk	デフリンピックのような大きな大会では外国からも多くの観客が集まることが予想されます。大会によって異なりますが、IDカードあるいは入場券の確認、時にはパスポートの確認をしたりして、入場管理をします。また、試合後は交通手段やホテルの場所などについて質問を受けることも予想されます。	スタッフが身振りや筆談で対応しますが、国際手話による説明動画や視覚的に分かりやすいサインボードがあればなお良いでしょう。万が一に備えて競技会場ごとに国際手話通訳の提供が望ましいです。
観客席 Audience Seats	試合観戦中に注意すべき事項を観客に伝え、非常時には会場責任者の指示に沿って観客を誘導します。会場のアナウンスなどに気づかない観客がいたら教えてあげることも必要な配慮です。観客に怪我や体調不良が起きた時に救護スタッフに連絡することもあります。	スタッフが身振りや筆談で対応しますが、国際手話による説明動画や視覚的に分かりやすいサインボードがあればなお良いでしょう。万が一に備えて競技会場ごとに国際手話通訳の提供が望ましいです。
出発（空港等） Departure	各国の選手団が空港に到着し、航空会社の受付でチェックインを済ませて税関検査を受けるまでが、見送りになります。射撃競技や陸上競技などの選手が競技用具の一部の持ち込みについて特別な手続きを取ることもあります。	選手団の代表（チーム・リーダー）と国名、氏名、人数などを国際手話で確認します。出国審査やメンバーの体調不良など有事に備えて空港ごとに国際手話通訳の提供が望ましいです。

国際的なデフスポーツ大会において国際手話コミュニケーションが発生する場面を見てきました。全ての場面で国際手話通訳が必要というわけではありません。きこえる審判員、宿泊施設のスタッフ、食堂のスタッフ、旅行業者、バスなどのドライバー、会場受付などの担当者は、外国から来るろう者の接遇方法について基本を学ぶ取組みが求められます。
国際的なデフスポーツ大会を主催する組織委員会の役員やスタッフ、きこえない競技委員などは国際手話コミュニケーションにある程度対応できるよう習得しておきたいものです。それでも、競技運営や怪我の発生などでより正確かつ迅速なコミュニケーションが求められる場面では、ろう者ときこえる人のペアによる国際手話通訳の提供が望ましいです。必要に応じて各国の選手団所属の通訳が加わることもありますが、きこえる人が音声の外国語にも対応できる場合はより広範囲で対応が可能になるでしょう。

国際的なデフスポーツ大会における国際手話通訳としての心構え

スポーツ分野で通訳するための準備

きこえない人のスポーツ活動を通じた社会参加を支える手話言語通訳者が、通訳者としての倫理観を備えた上で準備しておくべき知識と技術を、「共感力・協働力」「言語技能・表現力」「場面対応力、実践力」「スポーツ関連・競技ごとの専門知識」の４テーマに整理しました。

国際手話通訳者として活動する上で、通訳技術を持っていることはもちろんですが、さまざまな場面に対応できるように現場力等のプラスアルファのスキルが不可欠になります。
ver1,2,3にある図解をご参照ください。

1. 現場の流れ

国際手話通訳の現場は次のようになっています。

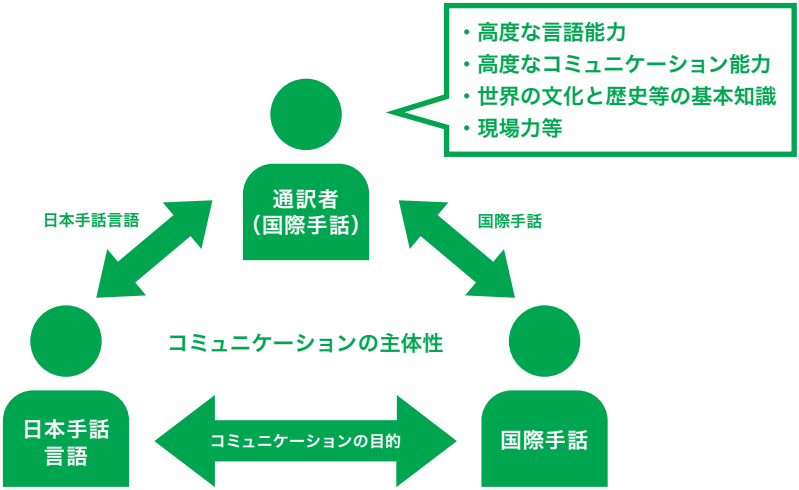
事前準備 情報収集	事前 打ち合わせ	本番	フィードバック

１週間前 → 当日

国際手話通訳を利用するろう者のコミュニケーション方法は、社会的背景と教育を受けた環境によってさまざまです。手話言語だけを用いる人もいれば、補聴器を活用しながら手話言語を用いる人もいます。また、音声言語を習得した後に手話言語を身につけた人も少なくありません。手話言語通訳をするにあたっては、それぞれのコミュニケーション・ニーズを把握し、双方のコミュニケーション目的をつなげるようにしましょう。
長時間通訳をする場合、チームを組んで通訳することがよくあります。チーム通訳では、双方のコミュニケーション目的を達成するという目標を共有することがまず大切です。事前打ち合わせでは表現の確認の他に、交代時間が近づいてきたときの合図や、数字や長い固定名詞が出てきたときのフォローについて、自分なりの希望をペアの通訳者に伝えるとよいです。
通訳者同士のフィードバックは、良かった点や改善するべき点を共有するために行います。フィードバックの時間を設けることで技術の向上を図ることができ、次の通訳をさらに良いものにする絶好のチャンスです。客観的な視点と豊富な知見を持って現場を振り返り、次の現場に活かせるようにしましょう。
国際手話通訳の仕事はデフスポーツに通ずるものがあります。デフアスリートは、その競技をするために必要な体力や技術、戦術、心的能力を向上させるために、毎日のコンディションを自分で管理するようにしています。国際手話通訳者も同じで、常に体調管理することが大切です。通訳をしている間はリアルタイムでことばを通訳するだけでなく、同時に複数のことに集中しなければならないという緊張感が続くため、かなりの体力を消耗します。本番で最高のパフォーマンスができるようにするためには、睡眠、運動、食事によってきちんと自分の心身の調子を整えておくよう心がけましょう。

国際的なデフスポーツ大会における国際手話通訳としての心構え

2. 国際手話通訳者の心構え



手話言語通訳の仕事は単なることばの置き換えではありません。双方間コミュニケーションを成り立たせるためには、話者が伝えたいメッセージを理解することがまず大切です。相手が共通の国際手話を使っていたとしても、そのことばには彼らの文化における価値観や信条が隠されています。世界の文化と世界史の基本的な知識は、その隠れたものを適切に汲み取って通訳をするとき役に立ちます。同じ国であっても価値観が異なることもあります。したがって、相手の伝えたいことを汲み取ることは、相手がどこの国の人なのかということに加えて、その人の持つ価値観にも注意を向けて通訳することが必要になります。話者のメッセージを注意深く「きく」洞察力が求められるのは、このためです。

話者の伝えたいことを汲み取ったら、今度はそれがもう一方に伝わるようにする表現力の出番です。表現は受ける側によって理解の仕方が変わってきます。特に通訳者のトーン等が話者に対する印象を作るので、適切な通訳ができなかった場合は両者の関係に影響を及ぼしてしまうこともあります。ことばを表面的に置き換えるのではなく、最適な通訳ができるように幅広い場面で活用できる国際手話と日本手話言語の豊かな表現力を磨くことも大切です。

最後に、会議等では予想外のトラブルが発生することがあります。例えば、ネットワーク障害によってオンライン会議が中断されて予定時間をオーバーしたり、誤解が生じたまま会話が進行してしまったりすることもあります。他に、国際手話が堪能な日本人が予定していない日本手話言語で発言、もしくは日本手話言語で発言する予定が国際手話で発言する場合もあります。さまざまな事態に備え、柔軟に対応しうる判断力が求められます。

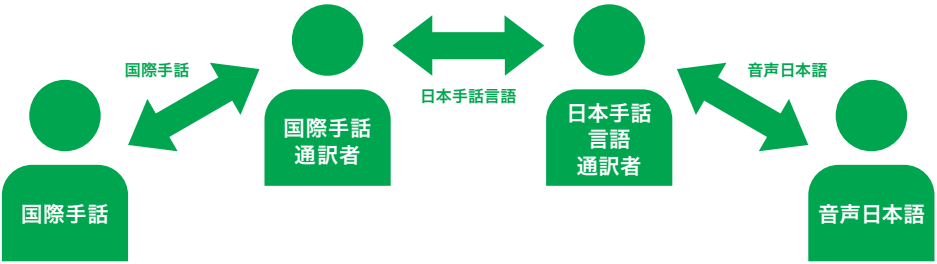
国際的なデフスポーツ大会における国際手話通訳としての心構え

3. 通訳の流れについて

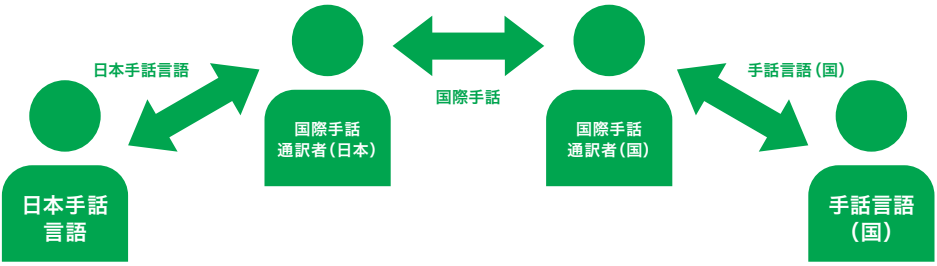
国際手話通訳者は、通訳者単独で行ったり、日本手話言語通訳者や各国の国際手話通訳者と協働したりするなど、さまざまな方法があります。よくある事例を3つ紹介します。

通訳者単独の場合

日本手話言語通訳者と協働する事例



各国の国際手話通訳者と協働する事例



このような通訳体制によって通訳の流れも変わっていきます。自分以外の通訳者と一緒に取り組む場合、チームワークづくりが肝心になります。チームワークが高ければ高いほど通訳環境が整い、通訳作業に集中することができるからです。

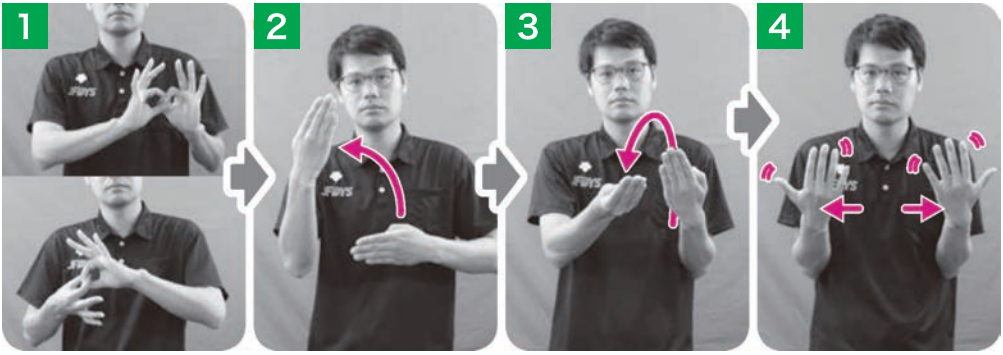
4. 手話通訳の倫理について

国際手話通訳者、一般の手話言語通訳者を問わず、通訳者として心得ておくべき手話言語通訳者の倫理があります。日本の「手話通訳士倫理綱領」と世界ろう連盟（WFD）と世界手話言語通訳者協会（WASLI）共同の「国際手話通訳者の行動規範と解説」を必ずご一読ください。

デフスポーツで使う国際手話の会話例

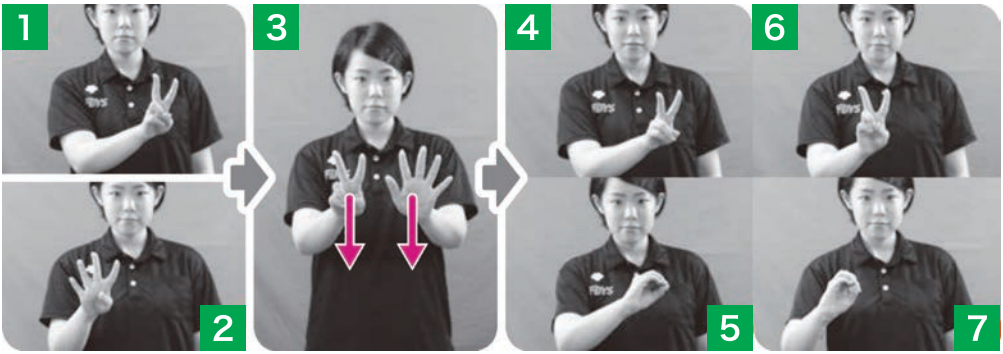
Q オリンピックはいつ開催されますか？
(When will the Olympics be held?)

オリンピック (Olympics)	開く (open)	カレンダー (calendar)	いつ (when)



A 2020年7月24日です。
(On July 24th, 2020.)

2/4 (two/four)	7月 (July)	2/0/2/0 (two/zero/two/zero)



※上記の例題は、2020年のオリンピックの日程ですが、
東京デフリンピックは2025年11月15日に開催します。

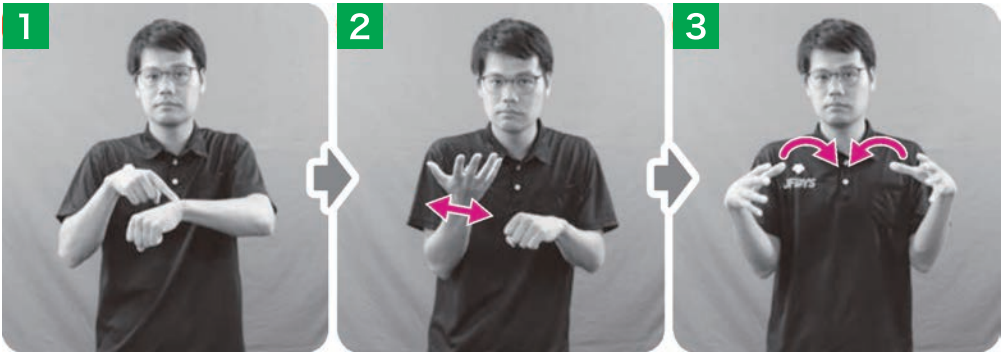
動画で確認！

出典：「Let's Try国際手話」編集委員会編『Let's Try国際手話』
全日本ろうあ連盟、2019年、44頁。

デフスポーツで使う国際手話の会話例

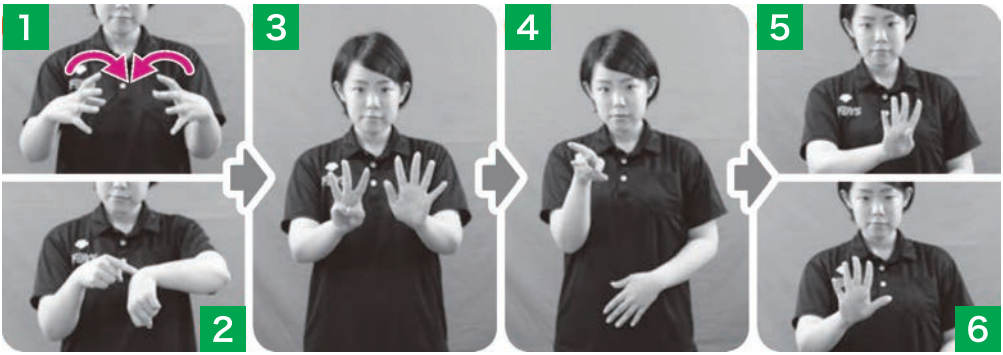
Q 集合時間は何時ですか？
(What is the meeting time?)

時間 (time)	何 (what)	集まる (meeting)



A 集合時間は午前８時 45分です。
(The meeting time is 8:45 am)

集まる / 時間 (meeting/time)	8 (eight)	コロン (:) (colon)	4/5 (four/five)



動画で確認！

出典：「Let's Try国際手話」編集委員会編『Let's Try国際手話』
全日本ろうあ連盟、2019年、45頁。

国際手話での数の表現

数字 number

1 one

2 two

3 three

4 four

5 five

6 six

7 seven

8 eight

9 nine

10 ten

11 eleven

12 twelve

16 sixteen

20 twenty

出典：「Let's Try 国際手話」編集委員会編『Let's Try 国際手話』
全日本ろうあ連盟、2019年、110-111頁。

国際手話通訳者の行動規範（WFD-WASLI）と解説

［倫理綱領・行動規範］

日本の手話言語通訳者が守秘義務などを定めた「手話通訳士倫理綱領」を守らなければならないのと同じく、国際手話通訳者も世界ろう連盟と世界手話言語通訳者協会が共同で定めた「国際手話通訳者行動規範」（WFD-WASLI International Sign Interpreters Code of Conduct、以下「行動規範」）を守ることが求められます。WFDには全日本ろうあ連盟が、WASLIには全国手話通訳問題研究会と日本手話通訳士協会が日本から加盟しています。認定国際手話通訳者はもちろんのこと、有償・無償にかかわらず、すべての国際手話通訳者はこの「行動規範」をよく理解し、遵守することが期待されます。

［国際手話通訳者の認定］

・国際手話通訳者の認定

国際手話通訳者は、世界ろう者会議やデフリンピックなど国際的なろう者のイベントのみならず、国際社会においてろう者の基本的人権が認められるにつれて、国際連合（国連）などの国際会議においても重要な役割を担うようになってきました。そのため、国際手話通訳者の質の担保が必要となり、WFDとWASLIは共同で国際手話通訳者の認定基準を策定し、2015 年から暫定的に認定を行うようになりました。なお、国際手話通訳者には、ろう者もきこえる人もなることができます。国連も手話通訳サービス使用のガイドラインで、認定手話通訳者の利用、特に当該地域の認定手話通訳者の採用、通訳の質を高めるためにろう者ときこえる国際通訳者が共にチームとして働くことを推奨しています。

・認定国際手話通訳者に必要な条件

2022 年の認定国際手話通訳者ハンドブックには、必要な条件などが記されています。国際手話ができるだけでは国際手話通訳者は務まらず、認定通訳者になるためには、次のような経験や知識、組織への帰属やルールの遵守などが求められます。なお、認定の一歩手前の条件を満たしている者は、プレ認定通訳者（pre-accredited interpreters）として登録申請できます。以下、一部紹介します。

［求められる必須能力］

・国際手話に熟達していること
・試験科目である英語・スペイン語・フランス語などに熟達していること
・国の手話言語および国の音声または書記言語に熟達していること
・他の専門家たちとチームワークや共同で働く能力があること

［求められる知識］

・国際的な地理、歴史、文化、社会問題など、時事問題の広範な知識を有すること
・デフリンピックなどろう者・手話言語通訳者の国際的な組織の構造や歴史について熟知していること
・さまざまな国の、文化、政治、歴史の知識を有すること

国際手話通訳者の行動規範（WFD-WASLI）と解説

［求められる資格］

・国の手話言語通訳者の職業的登録団体による正式な認定または登録
・国の手話言語通訳者組織、WASLI など、国または国際的な職業通訳者団体の会員であること
・国のろう者組織、WFD、EUD など、国、地域、国際ろう者組織の会員であること

［WFD-WASLI 国際手話通訳者の行動規範］

認定国際手話通訳者およびプレ認定国際手話通訳者は、全７条からなる「WFD-WASLI 国際手話通訳者行動規範」を遵守することが求められています。

・目的と範囲（第１条）

「行動規範」の目的は、認定通訳者としての業務において尊重すべき、誠実さ、プロ意識、守秘義務の基準を明らかにすることにあります。認定通訳者は、自国の手話言語通訳者協会の会員となると同時に、WASLI および WFD の個人会員になることが期待されています。また当然のことですが、認定通訳者は WFD-WASLI の「行動規範」に加え、自国の行動規範または倫理綱領を遵守することが求められます。これらに違反した場合、認定通訳者懲戒紛争委員会により認定資格の剥奪を含めた懲罰が科される可能性があります。

・職業行動と守秘義務（第２条）

認定通訳者は、職業上知り得た、すべての人に関するすべての情報について、最も厳格な守秘義務に拘束されることが強調されています。公開された場面であっても、利用者がイベント情報を広く宣伝している場合であっても、通訳者は SNS や個人的な会話などを通じて依頼に関する情報を流布してはなりません。唯一、情報共有が認められるのは、一貫した質の高いサービスを提供するために同僚通訳者や契約当事者に情報を開示する必要性がある場合に限られます。
認定通訳者は、常にプロ意識をもって行動することが求められます。例えば、職務上知り得た機密情報を利用して、個人的利益を得ることは禁止されています。同様に、職務遂行中は、次の仕事を得るために自分や所属会社の売り込みをしてはなりません。また、無償・有償にかかわらず、請け負った仕事の評価は、自分だけでなく、通訳業全体の名誉に影響を及ぼすことを認識しなければならないとされています。そのために通訳者は、仕事の交渉、準備資料の入手、服装の選択やプロとしての態度の取り方などにおいて通訳業に利益をもたらすような作法で行動することが期待されています。なお、交流の現場では、ろう者がきこえる相手と関係作りができるよう通訳することを優先するものと記されています。

国際手話通訳者の行動規範（WFD-WASLI）と解説

・職業判断に対する説明責任（第３条）

認定通訳者は、何も考えずに依頼を受けるのではなく、その任務が遂行できるか否か、プロ意識をもって判断することが求められています。「行動規範」では、判断や説明責任が求められる事項として次の８つを記しています。

・通訳者は、適した能力のない仕事、公平性を維持できない仕事を引き受けてはならない。
・通訳者は、任務を引き受けた場合、プロ意識を尽くして仕事をする道義的な約束をしたことになる。
・通訳者は、複数の通訳者を必要とする任務においては、有能で完全なチームを確保する責任を負う。
・通訳者は、自分の経験、教育、資格、能力について不正確な陳述をしない。
・通訳者は、専門家としての適切な判断力を発揮し、自らの決定に全責任を負う。 通訳者は、利益相反の可能性がある生じた場合は、そのことをすべての関係者に完全に開示した旨を保証する。
・通訳者は、 通訳業務のために他の通訳者を集める場合、 まずは他の認定通訳者を探し、その通訳者が適した能力を持ち、その任務に適した言語能力を有することを保証する。 認定通訳者が確保できない場合は、 その任務に最も適したその他の通訳者を確保するが、優先順位は常に WFD-WASLI 認定通訳者であることが期待される。 通訳者は、フィーダーと仕事をする場合、その通訳者が国の資格を持ち、フィーダーの役割を担うのに必要な訓練と技能を有していることを保証する。
・通訳者は、同じ期間に複数の任務を引き受け、ダブルブッキングしてはならない。
・通訳者は、公平性と客観性を保ち、文化的・言語的に適切な通訳を誠実に行う。通訳者は、政治的、宗教的、道徳的、哲学的な理由で自らその伝達内容を変えてはならない。

・職業を守る（第４条）

通訳者は、認定国際手話通訳という職業の品位を損なうような仕事や場面を引き受けてはならず、職業に不名誉をもたらすような行為も慎まなければなりません。

・職業上の関係（第５条）

職業としての国際手話通訳者の社会的地位を確立し、保持するために、専門家集団の一員としての行動を通訳者に求めています。

・労働条件（第６条）

通訳者は、最高の質の通訳を提供するため、次のことを守り、努めるものと定められています。

・効果的な通訳をするために、音響、視界、快適性など、常に満足できる条件を確保する。
・会議形式の場面では、原則としてチームで仕事をする。
・チームは任務に必要な言語要件、技能など専門的なサービスの提供をサポートできる形で編成する。
・音声話者 / 手話話者および会場を直接見る必要があるため、原則、遠隔地での仕事には同意しない。
・作業文書、テキスト、ビデオ映像を事前に入手することを要求し、利用者 / 主催団体から提供された物や資料を適切に管理する。

・継続的な専門能力開発（第７条）

通訳者は、専門職としてのキャリアの期間中、継続教育を通じて、新しい理論や応用方法を学習するなど、自らの能力向上に努めるものとされています。なお、WFD-WASLI の認定国際手話通訳者は、一年間に一定時間数の継続教育を受けることになっています。

第23回夏季デフリンピックに出場、メダルを取った選手4人に、スポーツ活動で困ったことを話していただきました。動画を下記サイトに掲載しています。

https://youtu.be/PBvezrrD2MM

デフスポーツにおける手話言語通訳者の育成等に係る検討委員会 委員名簿

国立大学法人筑波技術大学 教授	大杉 豊（おおすぎ ゆたか）
一般社団法人日本手話通訳士協会 理事・事務所長	草野 真範（くさの まさのり）
アジア経済研究所新領域研究センター 主任調査研究員	小林 昌之（こばやし まさゆき）
一般社団法人日本デフバレーボール協会 理事	布山 和司（ふやま かずし）
一般社団法人日本デフビーチバレーボール協会 選手	今井 勇太（いまい ゆうた）
日本デフオリエンテーリング協会 代表	野中 好夫（のなか よしお）
全日本ろうあ連盟スポーツ委員会 事務局長	山田 尚人（やまだ なおと）
全日本ろうあ連盟スポーツ委員会 委員	稲葉 智子（いなば ともこ）

デフアスリートをささえる *vol.4*

発行日　2024年3月1日

発　行　一般財団法人全日本ろうあ連盟
スポーツ委員会
ＴＥＬ：03-3268-8847
ＦＡＸ：03-3267-3445
メール：jfd-sc@jfd.or.jp
ＵＲＬ：https://www.jfd.or.jp/sc/

一般財団法人全日本ろうあ連盟 スポーツ委員会

このガイドブックは、令和5年度スポーツ庁委託事業「障害者スポーツ推進プロジェクト（障害者スポーツの指導・普及等のための競技別マニュアル等の作成）」の一環で作成しました。

［関連情報］

「Deafsportal（デフスポータル）」
デフスポーツ・デフリンピックの情報を発信する総合ポータルサイトです。最新情報が随時更新されています。
https://deafsportal.com/

『スポーツ手話ハンドブック』
スポーツ大会や式典、大会運営に関わる人に役立つ用語を中心に幅広い分野の手話を246単語収録、さらにスポーツ関連の情報を掲載しています。
https://jfd.shop-pro.jp/?pid=132926516

「聞こえないスポーツ選手のメディカルサポートについて」
聴覚障害ならではの特性や事例などをより深く知っていただくきっかけに作成しました。
https://www.jfd.or.jp/sc/files/deaflympics/deafsports-medicalsupport.pdf

「デフアスリートをささえるVol.1」
https://www.jfd.or.jp/sc/files/deaflympics/deafathlete-sasaeru-vol1.pdf

「デフアスリートをささえるVol.2」
https://www.jfd.or.jp/sc/files/deaflympics/deafathlete-sasaeru-vol2.pdf

「デフアスリートをささえるVol.3」
https://www.jfd.or.jp/sc/files/deaflympics/deafathlete-sasaeru-vol3.pdf

「デフアスリートをささえるVol.4（国際的なデフスポーツ大会における国際手話通訳編）」
https://www.jfd.or.jp/sc/files/deaflympics/deafathlete-sasaeru-vol4.pdf

「デフアスリートをささえる競技別手話言語通訳ガイド バレーボール編」
https://www.jfd.or.jp/sc/files/deaflympics/deafathlete-sasaeru-volleyball.pdf

「デフアスリートをささえる競技別手話言語通訳ガイド ビーチバレーボール編」
https://www.jfd.or.jp/sc/files/deaflympics/deafathlete-sasaeru-beachvolleyball.pdf

「デフアスリートをささえる競技別手話言語通訳ガイド オリエンテーリング編」
https://www.jfd.or.jp/sc/files/deaflympics/deafathlete-sasaeru-orienteering.pdf

「国内の各デフスポーツ団体ウェブサイト」
https://www.jfd.or.jp/sc/sportsassoc